

コンタクト・ゾーンにおける文化の変容と創造 —大阪市西淀川区の事例から—

寄本圭子

大阪公立大学大学院文学研究科 人文学学際研究センター研究員

1. はじめに

本報告の目的は、多文化化、多国籍化が進む現代日本社会において、文化的に多様な人びとの文化の変容と創造の過程を通して、多様な人びとを包摂する社会のあり方をとらえることである。

本報告では、報告者のフィールドワークをもとに、多文化化、多国籍化が進む、大阪の周縁に位置してきた大阪市西淀川区の歴史的な経緯と地理的な要因をふまえ、文化的に多様な人びとの文化の変容と創造の過程を明らかにする。

多様な国籍やルーツ、文化を持つ人びとが共に暮らしている流動的な現実を捉えるためにコンタクト・ゾーン概念を用いる。コンタクト・ゾーンでは、権力による非対称性な関係が想定されており、その中の共存、相互作用、絡み合う理解と実践に焦点が当てられている (Pratt 1992:7)。コンタクト・ゾーン概念によって多様な人びとの接触、相互作用、変容による文化の創造を捉えたい。実際に人びとが暮らしていく中で、歴史的、年代的、空間的に幾重にも重なった多文化地域のコンタクト・ゾーンで変容し創造される文化とはいかなるものなのか。人びとの日常的な実践を見ていくことで、多文化共生という言葉ではとらえきれていた、多様な人びとが共に生きていくあり方をとらえよう試みる。

2. 多文化化、多国籍化する西淀川区

本報告で対象とする大阪市西淀川区は、大阪市の北西端、神崎川と淀川の河口に位置する。江戸時代まで漁業が主に行われており、現在も大阪市漁業協同組合として、うなぎ漁などが行われている。西淀川区では、明治から昭和の初期にかけ、交通の発展に伴い、紡績、食品・化学、鉄鋼、機械、金属といった近代工業が集中し工業地帯を形成した。第二次世界大戦後の高度成長期に、工場の煤煙や自動車の排気ガスなどにより、大気汚染による公害問題が発生した。1995 年、西淀川公害訴訟は和解に達した (大阪都市協会編 1996)。公益財団法人公害地域再生センター (愛称: あおぞら財団) が設立され、公害の記憶を次世代へと引きついでいく努力が続けられている。あおぞら財団は、地域づくりにも取り組んでいる。

一方、第一次世界大戦後に、西淀川区においても、朝鮮半島出身者が工場労働に従事し、また、朝鮮半島出身者による飯場が多く存在していた。1946 年に西淀川区各地に国語講習所が設置され、1947 年に朝鮮私立西淀川小学校、1948 年に福島区に福島朝鮮初等学院が創立された。1952 年に福島朝鮮小学校が再建され、1970 年に西淀川区姫島に新校舎が建設された (大阪民族教育 60 年誌編集委員会 2005)。2023 年に、大阪福島朝鮮初級学校は、北大阪朝鮮初級学校に統合された。

1990 年の入管法改正で日系三世に「定住者」の在留資格が可能になったことから、工場などの働き手として、日系のブラジル、ペルーなど南米からの人びとが西淀川区に多く居住するようになった。さらにフィリピン、ベトナムなどからの技能実習生が増加した。また、イスラーム施設ができたことにより、周囲にハラール食品店やハラールレストランが集まり、パキスタン、スリ

ランカなどからのムスリム（イスラーム教徒）が増加している。

3. 西淀川区における多文化共生の取り組み

大阪市は、外国人住民の急増や国籍等の多様化などに対応するために、「大阪市多文化共生指針」を2020年12月24日付けで策定し「多文化共生社会」の実現に向けた施策を推進している。西淀川区では、大阪市の政策を受けた支援以外にも、西淀川区独自の、行政、民間による、外国にルーツを持つ人々への支援や多文化共生の取り組みが行われている。主な取り組みとして、ボランティア団体・西淀川インターナショナルコミュニティー（NIC）、出来島小学校生涯学習ルーム出来島識字・日本語交流教室、西淀川区地域福祉計画・地域福祉活動計画「西淀川ささえあい・プラン」ウェルカムバンク部会、出来島商店会・インターナショナルきら☆きら通りなどの活動がある。実際にその活動を担っているのは、ほとんどが有償・無償の地域のボランティアである。

4. 西淀川区に開設された2つのイスラーム施設の役割

西淀川区において、国語講習所があった地域には、朝鮮半島出身者が集まって暮らすエリアがあった。現在ではそれらのエリアに暮らす若い世代は少なくなっている。それらのエリアと隣り合って、現在ムスリムが多く暮らしている地域もある。

西淀川区には、大阪市に4つあるイスラーム施設のうち、大阪マスジドと大阪イスラミックセンターの2つが開設されている。2つのイスラーム施設では、ムスリムの生活の拠り所として、情報の提供を行い、礼拝と祭り、相互扶助、教育、交流の場、居場所という役割に加え、大阪マスジドではムスリマ（女性ムスリム）の憩いと出会いの場、大阪イスラミックセンターでは、ムスリマ、なかでも日本人女性改宗者に対しての居場所、子どもについての支援・交流の場としての役割が生み出されている。

大阪マスジドでは、地域の住民の代表として連合町会長と府会議員がムスリムと連絡を取り合い、マスジド・ムスリムと、地域住民の間の摩擦の軽減への努力が続けられている。ムスリマにとっては、憩いと出会いの場になっている。

大阪イスラミックセンターでは、ムスリマ、なかでも日本人女性改宗者に対しての居場所を作り上げていっている。婚姻を機に改宗した人は夫の出身国もさまざまであり、自主的に改宗した人、子どもと海外移住したのちに帰国した人、イスラームから遠ざかりがちな人など、多様な女性たちが生きていきやすくなるように居場所を作り上げていこうとしている。また、子どもについての支援・交流の場としての役割も担っている。地域の学校や支援教室にムスリムの子どもたちが増加し、直接指導することが増えているため、教育関係者は、ムスリムの生活背景を知るために、食事会や交流イベントなどに参加している。

また、西淀川区役所防災担当による防災教室が大阪イスラミックセンターで開催され、多くのムスリムが参加した。ムスリム住民の増加により、イスラーム施設は地域においてさらに多様な役割が期待されている。

5. おわりに

ムスリムを含む多様な人々が暮らす地域社会において、さまざまな国の文化から影響を受けた日本のイスラーム文化をつくりあげていく試みがなされている。その試みは、変化を続けながら地域の文化の変容と創造につながっている。

しかしながら、朝鮮半島出身者は、地域社会の形成に寄与してきたが、多文化共生の取り組みとは分断されてきた。

地域の商店会は衰退の危機にある状況に気づいており、地域活性化の為、多様な居住者と共に、変容していくことに存在意義を見出しており、多言語対応や多文化フェスティバルを行っている。

NICでは、多様なルーツを持つ人びとも運営に関わっているが、地域に暮らす人びとのルーツの変化と共に支援者の意識も変容している。

大阪市西淀川区では、これまで多様な人びとが変化しながら隣り合って暮らしてきたことが、文化的に多様な人びとの文化の変容と創造を可能にしていると考えられる。

参考文献

- 大阪民族教育60年誌編集委員会編, 2005, 『大阪民族教育60年誌』, 学校法人大阪朝鮮学園.
大阪都市協会編, 1996, 『西淀川区史』 西淀川区制七十周年記念事業実行委員会.
寄本圭子, 2025, 「多文化地域におけるイスラーム施設が生み出す役割—女性・子どもへの支援に着目して—」 フォーラム現代社会学 24 (0): 57-71.
Pratt, Mary Louise, 1992. *Imperial Eyes : Travel Writing and Transculturation*, London: Routledge.